様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年５月２１日現在

機関番号：２５４０３
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2009～2011
課題番号：２１５２０１０７
研究課題名（和文）プラトン美学におけるアイステーシス論の創始と展開

研究課題名（英文）Creation and Development of the Theory of *Aisthesis* in Plato's Aesthetics

研究代表者
関村　誠（SEKIMURA　MAKOTO）
広島市立大学・国際学部・教授
研究者番号：20269583

研究成果の概要（和文）：本研究では、プラトンの思想の中でのアイステーシス論を分析して、それが哲学的思索の構造へ組み入れられていることを示した。このアイステーシス論が『パイドン』において確立されており、それが『国家』では展開されて、とりわけ現れの受容の場面における〈尺度〉の概念が感覚機能と知性的認識とを結びつける役割を果たしていることを確認できた。このように、プラトン思想におけるアイステーシスの位置づけを再評価した。

研究成果の概要（英文）：In this research, I analysed Plato's theory of *aisthesis*, which is integrated into his philosophical structure. I confirmed that this theory is established in the *Phaedo* and is further developed in the *Republic*, where the notion of measure plays an important role in connecting sensory function with intelligent recognition. In this way, I have sought to re-evaluate the significance of *aisthesis* in Plato's thought.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	700,000	210,000	910,000
2010 年度	700,000	210,000	910,000
2011 年度	300,000	90,000	390,000
年度			
年度			
総　計	1,700,000	510,000	2,210,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：哲学、美学・美術史
キーワード：美学、プラトン、感性論

１．研究開始当初の背景

（１）美学という学問は、今日、「感性論」として捉え直す必要に迫られている。それは、美学が Aesthetica の語源としてのアイステーシス（aisthêsis）にさかのぼって、人間の感性のあり方を問う学問として位置づけられてきていることの再認識からである。従来の美学においては、その学問としての１８世紀における確立以前に、源流として古代ギリシアのプラトン思想があげられ、そこでは、美やミーメーシスについての議論が研究対象とされることが多い。アイステーシスという語をイデア論を含む形而上学的思索の構造に積極的な仕方で組み入れようとした思想伝統の創始者としてプラトンを新たに読み解いていくことが望まれる。感性論の歴史的な出発点としてのプラトン思想を詳細なテキスト分析を通してもう一度見直し、この思想の発展のあり方を精査した上で、プラトン芸術論の再検討を行ないその現代的意義

を追究するべきである。
（２）近年、美学を芸術よりも「感覚」を主たる研究課題とする「感覚学」として再構想しようとする試みが、いくつか見られる。このような、美学の感性論としての見直しに関する原点回帰的主張は、最近の問題提起として出されてきてはいるが、アイステーシス論の創始者ともいえるプラトンの思想こそ、まさに原点としてテキスト分析から始めて反省的に研究されるべきでろう。しかし、その考察は未だ十分とは言えない状況にある。従来の研究動向を省みると、プラトン美学の解釈においては美や芸術に言及した散在するテクストに考察対象がしぼられ、それらを断片的に取り出し分析して、古代の思想家の芸術論を再構築しようとする試みが多く、アイステーシスの問題を正面から扱った研究が見られない。
（３）申請者は、これまで、プラトンの美学を中心に研究を行ってきた。そのなかで、従来の研究に多くみられた芸術論の枠内で解釈する方向とは異なる方針をとって、とりわけ「似像」（*eikôn*）と「虚像」（*phantasma*）、また「現れる」（*phainesthai*）という事態に着目し、これらの概念をめぐる諸問題に関して考察を行ってきた。この〈現れ〉の問題をミーメーシスとの関連で追究し、『像とミーメーシス』（勁草書房、1997 年、研究成果公開促進費助成による出版、東京芸術大学提出博士論文に手直しを加えたもの）にまとめた。また、申請者は、像に関与する模倣行為を規定する「型」としてのテュポス（*tupos*）の概念の解釈を、論文« Le statut du *tupos* dans la *République* de Platon » (*Revue de Philosophie Ancienne*, 17, no.2, 1999, pp. 63-90.)においてさらに掘り下げて考察した。そして 2006 年 12 月、ベルギー、ブリュッセル自由大学に提出した博士論文 *Réception et création des images chez Platon*, (Université Libre de Bruxelles, Année académique 2006-2007, 371p. 学位 Docteur en philosophie 取得)において〈現れ〉の受容と創造の問題を考察して、プラトンにおいてイメージの理論とイデア論とが補完し合う関係にあることを示した。このように、申請者は本研究以前に準備段階として、プラトン思想における感性論的な側面に関わる問題についての研究を進めてきた。こうしたこれまでの〈現れ〉の問題、またそれに付随する「作る」行為や「見る」行為の問題についての考察は、アイステーシスの問題を考究することでより発展的に追究されると考えられる。

２．研究の目的
（１）アイステーシスに関わる諸議論を、イデア論を含む形而上学的思索の構造に積極的な仕方で組み入れようとしたプラトンの思想をテキスト分析を中心にして解釈を試みる。感性論の源流としてプラトンをみようとするとき、これまでとは異なった研究のアプローチができ、否定肯定入り交じった複雑な様相を見せるプラトンの芸術論を新たな観点から見直すことができる。プラトンにおけるアイステーシス論の明確化を基礎として、芸術行為に関する理論をも基礎づけることを目指す。
（２）プラトンのイデア論においては、たしかに感覚や感覚で捉えられるものは存在として低い位置づけがなされている。しかし、プラトンはこの感覚世界で生きるための思索を深めたのであり、そのなかで感性と知性とをあわせもつ人間の分析がなされている。この基礎づけを踏まえて芸術創造の働きをプラトンの思索展開の中に位置づけていく。このような観点から、本研究では、プラトンの哲学構造へ組み入れられ、位置づけられた感性の理論とイデア論とが表裏一体をなしていることを示していく。アイステーシスの理論を深めることなしには、イデア論は提示できなかったことを、テキストに沿って詳細な解釈を通して明確にしていく。そのために、本研究の期間内では、プラトン中期の対話編を中心として研究対象とし、　イデア論の確固たる表明の見られる『パイドン』の解釈から始める。それを通じて、プラトンにおけるアイステーシス論の創始の地点を明らかにして、さらにその発展と展開を具体的なテキスト分析に基づいて追究する。
（３）アイステーシス論の観点からのプラトン解釈によって、感性論あるいは感覚論としての美学の原点回帰的復権という現代の学問的営みを、まさにその原点から支えための一助としていく。そのために、これまでの美学では考察対象にしてこなかった対話編や概念に新たに光を当てることになる。本研究では『パイドン』の「浄化」に関する議論の考察から出発するが、同対話編の前半部分のこの文脈を美学の分野で扱う研究がこれまでなかった。「浄化」概念はアリストテレスの美学研究とは異なって、検討がされていない。こうした観点からの本研究は、受容と創造における感性の様態がもちうる可能性の問題を解明することにより、現代のわれわれ自身の経験する感性のあり方や、さらには現代の芸術の意味を反省するための基盤となり得ると思われる。プラトンの思想におけるアイステーシスの位置づけを再評価して、現代的な意義を理論へ寄与しうる諸要素を引き出す。

３．研究の方法
（１）従来、プラトン美学の議論において考察対象となることの少なかった対話編にも

目を向けて、人間の感性的経験の様態の詳細な分析を基盤としている議論の意味を明らかにする。アイステーシスの問題をプラトンのテクストの再解釈から始めて感性論の歴史的出発点の思索の有り様を浮き彫りにするために、ギリシア語原典の分析作業を綿密に行う。その際に解釈の観点を固めるためにキーワードとなる概念を定めて、その概念をめぐってアイステーシスのあり方を明確化するように努める。とりわけ、『パイドン』における「浄化」、「想起」、『国家』における「影」「尺度」など、感性経験と関係する諸概念がどのように哲学的議論に組み込まれているかを追究する。

（２）プラトンにおける感性の理論が彼自身の哲学に不可欠なかたちで組み入れられた地点を明確にするために、対話編『パイドン』の前半部分を考察対象として、テキスト分析を行う。イデア論と呼ばれるものについてプラトンが明確に言及してこの思想的立場を確立したのが『パイドン』であり、その同じ対話編のなかで彼自身の感性論が確立されたという点に注目して、プラトンにおけるアイステーシスとそれに関わる諸要素をめぐる問題の重要性を示していく。そこでは、これまで美学の分野で着目されることのなかった魂と肉体の分離についての議論に対して新たな読解を試みる。そこでは、「感覚」がいかなる位置づけがなされているかを明確にすることを目的とする観点から、「浄化」の概念の文脈に沿った解釈を試みる。感覚は肉体と結びついたものであるが、テキスト分析を通じて肉体のあり方に引きずられない感覚独自の機能をプラトンがこの文脈において示していることを明らかにする。浄化は魂と肉体の分離に関わり、肉体を否定するものであるが、感覚機能そのものをすべて否定するわけではなく、かえって、感覚を鋭敏化することに通じてもいるという解釈を提示する。

（３）プラトンにおけるアイステーシスのあり方を明確化するキーワードとしての「尺度」、「測定術」、「場」「デーミウールゴス」などの概念と、それらをめぐって、感覚の領域に関わる機能がいかに働いて彼の思想構造に組み込まれているかを明らかにしていく。それによって、『パイドン』以後のプラトン思想の展開においても感性の機能に対する問題意識が形而上学的思索の発展に通底していることを明確化することを目的とする。「尺度」（*metron*）に関しては、感覚の対象のあり方と感覚の機能のあり方とを秩序づける働きをもっているが、まずは感覚の対象にそくした働きを明確にする。「虚像」（*phantasma*）としての現れと「似像」（*eikôn*）としての現れを区別する要因として、モデルとの尺度に適っているかどうかという「つりあい」（*summetria*）の問題を考察する。ここでは、「似像」の条件であるモデルと現れとの間の事実上のつりあいと、「虚像」をもたらす見かけ上のつりあいとを見定めた上で、前者のつりあいとの関連で、プラトンが「尺度に適ったもの」と「尺度に反したもの」とを対立させていることを示していく。こうした感覚対象の側の「尺度」の問題に対して、プラトンは『国家』において、感覚する人間の側にも内在するものとして「尺度」を認めている。これをふまえて、感覚する側に内在するこの「尺度」と感覚対象の「尺度」との相互関係を明らかにしていく。

４．研究成果

（１）『パイドン』編にプラトンのアイステーシス論の創始を見定めることにより、浄化や想起に関わる議論の分析を通して、イデア論とアイステーシス論の緊密な結びつきを確認した。

（２）現れの感覚経験を基盤とした創造活動の一つとしてのスキアグラフィアのプラトンにおける評価を分析して、イメージの受容と創造にかかわるプラトンの立場の一端を明らかにした。

（３）プラトン思想において、「尺度」の概念が感覚対象のあり方と感覚機能のあり方とを秩序づける働きをもっていることを明確にし、さらに、「虚像」としての現れと「似像」としての現れを区別する要因として、モデルとの尺度に適っているかどうかという「つりあい」の問題を考察した。この問題については、国際プラトン学会で発表を認められ、研究公表することができた。

（４）さらにプラトン思想に大きく影響を受けたプロティノスの美学思想においてもアイステーシスの問題は引き継がれ、発展させられており、今後の研究課題として意識された。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

①<u>関村誠</u>、「プラトン『国家』における〈尺度〉の問題」、広島市立大学芸術学部・芸術学研究科紀要、第１６号、2012、30-36.

②<u>関村誠</u>、「プラトンにおけるスキアグラフィアの問題」、広島市立大学芸術学部・芸術学研究科紀要、第１５号、2010、52-58.

〔学会発表〕（計６件）

①<u>関村誠</u>、« Le statut des *thaumatopoioi* dans l'allégorie de la Caverne de Platon », Workshop Mars 2012 in École Normale Supérieure (Paris), iMouseion Project,

Multidisciplinary Research, IT and Publications, Center for Hellenic Studies, Harvard University, 2012年3月26日, École Normale Supérieure (Paris, France).
②関村誠、« *Tupos* chez Platon et *kata* dans la culture japonaise », Workshop, iMouseion Project, Multidisciplinary Research, IT and Publications, Center for Hellenic Studies, Harvard University, 2011年3月24日, École Normale Supérieure (Paris, France).
③関村誠、« La nature et l'homme chez Platon et dans la culture japonaise », Centre interdisciplinaire d'étude des religions et de la laïcité, 2011年3月23日, Université Libre de Bruxelles, Belgique.
④関村誠、« La beauté et la vertu chez Platon et Plotin », Centre d'études sur la pensée antique « kairos kai logos », 2011年3月16日, Université de Provence, France.
⑤関村誠、« La mesure et l'image dans la *République* », X Symposium Platonicum, International Plato Society（国際プラトン学会）, 2010年8月2日、慶応義塾大学.
⑥関村誠、「プラトンにおけるアイステーシス論の創始 ―『パイドン』篇を中心に―」、第６０回美学会全国大会、東京大学.

６．研究組織
(1)研究代表者
関村　誠（SEKIMURA MAKOTO）
広島市立大学・国際学部・教授
研究者番号：２０２６９５８３

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：